

巻ノ零 伊賀^いと開国

【伊賀】

今まで、長い長い旅をしてきた。

戦国を駆け抜けてきた姫武将^{ひめ}たちは、自らの、そしてこの世界に生きる人々の「生」の本質を、「夢」だと信じていたかと思われる。

人生は夢の間なれば。（小早川隆景^{こばやかわたかかげ}）

下天の内をくらぶれば、夢幻^{ゆめまぼろし}の如くなり。（織田信奈^{おだのぶな}）

一炊^{いつすい}の夢^{ゆめ}。一期^{いちご}の栄華^{えいが}。一盃^{いつぱい}の酒。（上杉謙信^{うえすぎけんしん}）

徹底^{てつてい}した現実主義者の仮面^{かふ}を被^かっていた武田^{たけだ}信玄^{しんげん}は、彼女たちのような儂^{はかな}い言葉を残し

てはいないが、その心のうちは宿命の好敵手・上杉謙信と同じだっただろう。

「生」は、いずれ終わる。

「死」が、訪^{おもとず}れることによって。

人間^{だれ}は誰も、この「運命」の結末からは逃^{のが}れられない。